

2013年6月6日

今回の演説で総長は、「伝える」ということを、宗門活動の基本に据えたいと語られました。それは後段を聞けば、「宗門の動きの基本的なことが伝わっていない」ことから、「伝える取り組み」を積極的に行っていこうということだと思われま

す。確かに伝達効果の確認と、伝達方法・手段の検討は必要なことです。しかしその前提に、何を伝えるのかという内容の吟味が重要であることは言うまでもありません。総長が言われるように、「伝える」ことに先立ってあるのは、私にまで「伝わった」、「伝えられた」という事実です。だとすれば、伝える内容の吟味は、伝えられた内容の確かめということになります。

つまり、私たちは本当に伝えられるべきことを正しく受け止め得ているのだろうか。換言すれば、私たちは聞くべきことを本当に聞き得ているのだろうか、ということです。「伝える」ことを重視するのであればこそ、その前にこうした問いに立ち止まらねばなりません。

では、いま私たちが確かめなければならない「伝えられるべきこと」「受け止めるべきこと」「聞くべきこと」とは何でしょうか。それは総長が、いま一度立ち返る必要があると述べられた「宗憲の精神」でありましょう。そしてその宗憲とは、総長の言葉によれば「同朋会運動の歩みのなかで、部落差別問題、靖国問題、教団問題をはじめとする重要な「問い」をたまわり、私たちの先輩方の厳粛な懺悔に基づく菩提心の結実として、成立したもの」であり、「同朋会運動推進の根本」であります。

この発言に依れば、立ち返るべき宗憲の精神はさらに以下の三点に開かれて確認されねばなりません。

第一に、総長が重要な問いとしてたまわったと言われる三つの問題は、現在いかなる課題として受け止められているのか。

第二に、それらの問題に遭遇した当時の「厳粛な懺悔とそれに基づく菩提心」は、現在いかなるかたちで伝えられ受け継がれているのか。

第三に、それらの問題を経て結実した宗憲の願いは、現在どのように受け伝えられ、同朋会運動としていかに表現されているのか。

これらの問いの前に立つとき、私の脳裏に浮かぶのは「空洞化」という言葉です。あたかも総長は今回の演説で、現代を「空洞化」の時代と表現されました。私にはそれが

そのまま現在の教団状況を言い当てている言葉として聞こえました。失礼ながらその一文を言い換えてみます。

現在の教団は、ひとことで言えば「空洞化」の時代であります。「空洞化」とは、なにか形式上は合理的で良く整っていて、表面上は問題が無いように見える、けれども中身が無い。無関心で、空虚な、意識が浮遊しているようなそういった言葉で表される教団の有り様です。宗政の空洞化、教学の空洞化、議会の空洞化、ことに「宗憲の精神の空洞化」ということが、現在の教団の課題であり、そのうえ、実のところ、この「空洞化」を課題とし得ない。そういう、非常に困難な、むずかしい時代に、私たちは遭遇しているのであります。

部落差別問題、靖国問題、教団問題をはじめとする重要な問題によって、私たちが求め、作ってきた教団と同朋会運動が問い糾され、教団の闇の深さ、傲慢さが、厳しく思い知らされました。しかし、わずかな年月を経た今、教団の在り方を真摯に問い続ける歩みが疎かになり、またぞろ、人間の自我意識に翻弄されている感が否めません。

まさしく、問わなければならないことが問えない。本当に問題にしなければならないことは何か、それがはっきりしない。そういう風潮が、教団の事象のあらゆる場面に現れております。教団の在り方に「慚愧」することがない。「慚愧」を忘れるということは、教団を喪失することでありましょう。

いかがでしょうか。この「空洞化」という言葉をキーワードに、先に提起した問題を念頭に置き、総長が挙げた三つの問題を考えつつ質問したいと思います。

まず第一に「教団問題」です。

時代の要請に応え得る教団の確立のためにその近代化を志向した同朋会運動は、運動開始7年目にして教団問題に遭遇します。むしろ同朋会運動が教団問題を引き起こしたと言えるでしょう。皮肉にもそこで露呈したのは「僧侶教団的体質」と言われる前近代的封建体質の根深さでした。教団は運動15年目に、教団問題の顕在化を「宗教的精神の欠落と悪しき世俗化の典型」とであると懺悔を持って受け止めます。そして教団の体質改善の目標と手順が明確でなかったという反省に立って、「古い宗門体質の克服」という基本課題を掲げ、運動を推進していく決意を表明します。それはやがて宗憲において「同朋社会の顕現」「同朋公議」という基本理念に結実します。その経緯は、総長の言われる「厳粛な懺悔に基づく菩提心」の歩みと言えるでしょう。

しかし問題は、今なお私たちがその精神を受けついでいると言えるのかということです。昨年2月前内局によって提示された「総括・課題提起書」にはこのような一節があ

ります。御修復成った御影堂を評し、「宗門はあらためて、世界宗教たる浄土の真宗が民衆の宗教であることを証しした」と。ここには「厳粛な懺悔」はおろか、教団の現状を批判的に顧みようとする一切の視点が欠如しています。私はここに教団問題の空洞化を見ます。

教団にまだまだ色濃く存在する住職中心・僧侶中心・男性中心的体質は、「民衆の宗教」である「浄土の真宗」を裏切り続けてきたことをこそ証ししているのではないのでしょうか。「古い宗門体質の克服」という課題は既に過去のものなのではないのでしょうか。もしそうでないのなら、あらためて 36 年前の伝統に帰って、現在における「宗門の体質改善の目標と手順」をお示してください。

第二に「部落差別問題」です。

改めて言うまでもなく、わが教団は教団内における数々の差別事件を契機として、糾弾を受けてきました。それは教団が差別を温存し助長する体質と制度・教学を持つことを明らかにしました。その厳しい問い糾しを受けて、1969 年の第二回回答書において「教団の本質的な腐敗墮落に対し強いて目をつむってきた」と懺悔し、「封建教団と封建教学を徹底的に排除し、真に人間の本質に迫る教団と教学を確立する」と表明しました。また同年 10 月の『真宗』では「同和問題に取り組む教団の姿勢」という表題のもと、「同和問題について積極的に取り組むことによって教団の民主化をはかり、まさしく親鸞精神による教団本来の姿に立ちかえるべく運動を推しすすめていく」と宣言されています。

このこともまた、「懺悔に基づく菩提心」の表れと見ることができるでしょう。しかしながら、そのことが現在の私たちにまで伝わってきているとはとても言えない現状にあることは明らかです。

2010 年 12 月にこの議場で行われたシンポジウムにおいて、泉恵機氏はこのように語っています。

糾弾の空洞化という言葉は聞くのですが、そんなことではもう無くなってるのじゃないかという感じがします。つまり糾弾っていうのはもう無かったことになっている。

この発言は、糾弾の空洞化というよりは空無化と、糾弾によって発起した教団と教学の改革の空洞化を示唆しています。さらにはかつて言われた「同朋会運動が同和運動推進の母胎となり、同和運動の推進がまた同時に、同朋会運動の正しさの証となる」という言葉に照らせば、同朋会運動そのものの空洞化ということをも示しています。

総長は、長年部落差別問題に深く関わってこられたこの泉氏の発言をどのように受け止められるのでしょうか。そしてこの発言に頷くならば、いかなる方針と施策をもって臨まれつもらいかお聞かせください。

次に靖国問題です。

この問題は1969年に当時政権与党の自民党から提出された「靖国神社国家護持法案」に端を発するものでした。この問題は当初、政教分離を定めた憲法に反する信教の自由の侵害に関わる問題であると見られていました。

しかしその後の歩みの中で、靖国神社が天皇制国家体制と一体の施設であること、すなわち、その体制の行う戦争・侵略行為を聖戦として正当化し、戦死者を英霊として祀ることによって責任を不問に付し、後に続くことを促す軍事的施設であることが明らかになってきました。

それと同時に、教団がその国家体制に加担・共同し、靖国神社と同様の役割を果たしてきた事実も明らかになってきました。それはやがて1987年の「全戦没者追弔法会」における戦争責任の告白、1995年の「不戦決議」、さらに翌96年の高木顕明師の顕彰へと続きます。そこでは「宗門が、自らの過誤の歩みを検証し、あるべき宗門を生み出していく一歩である」と表明されています。この一連の歩みは「懺悔に基づく菩提心」の発露といえるでしょう。

しかし一方で、「見真額」は懺悔はおろか何の説明もないまま、今も依然として掲げられ続けています。その事実が何よりも靖国問題の空洞化の現状を雄弁に物語っています。

「見真額」についてはこの数年毎回議論され、私自身も3年前の常会において質問いたしました。すでに基本的課題は出尽くしている感があります。しかし「見真額」を下してほしいという多くの議員による、あるいは各地からの請願に対して、前内局は歴史の検証と課題の共有を待つて判断すると言いつづけました。そして議員学習会が開かれ、教学研究所による学習資料集が作成・配布されました。

こうしたここ数年の動きに対して、何点か質問いたします。

まず第一に、前内局は課題の共有が重要であると言いつながら、自らその課題が何であるかを鮮明にしませんでした。課題の共有という限り、共有しようとする側の課題の認識と提起が不可欠であると考えますが、現内局の認識をお聞かせください。

第二に、課題の共有と言いつながら学習会は議員に限られており、他に積極的に働きかけているようには見えません。今後どのように課題の共有をはかるつもりかお尋ねします。

そして第三に、教団近代史の検証は当然近代教学の検証でなければならないはずですが、にも拘らずこの学習会と資料集は、歴史の検証はなされてもその歴史を生み出した教学に対する批判的検証がなされていないという問題です。その影響は内局答弁の変化に如実に表れています。

2009年常会の答弁では、「天牌・見真額等は、これまで宗門の近代史を検証する過程において、戦前の天皇制国家と宗門との関係の問題が指摘されて」いるとし、「近代史の検証作業を継続し、宗門の負の歩みを明らかにして教団の社会的位置づけを検討しつつ、宗門の方向性を考えて」いきたいと述べています。

しかし2011年常会では、「私どもの先輩方が、真宗の名のり、いわゆる宗名問題、両堂再建をどのように願われ、懸命に歩まれたのかを確かめ続ける大変重要な学びであると認識した」と述べています。

2009年の時点では、教学に対する視点はなくても、まだ国家と宗教に関わる教団の負の歴史に言及されています。ところが2011年ではそれさえも消え、困難な時代状況の中で宗名問題・両堂再建という問題を抱えた教団状況が強調されます。

そしてさらに2012年常会では、そうした状況下における大師号請願は、「一宗の自立を目指して歩まれた先輩たちの純粋な願い」であり、「その願いを実現せねば宗門の存在自体が危うくなるとの危機感を持って努力された多くの人たちがあったことを忘れてはならない」と答弁されています。そして「広く宗門全体でこのような歴史の事実が確かめられることが最も大切である」と続きます。

すなわち、「近代史の検証」の結果、「見真額」は困難な状況の中で危機感を持って宗門の存続に努力した「先輩たちの純粋な願い」の象徴となり、「課題の共有」は、その歴史観の共有となったのです。これを靖国問題の空洞化と言わずしてなんと言うべきでしょうか。

今年4月6日、「全戦没者追弔法会」の記念講演において戸次公正氏は、「見真大師の額こそが真宗大谷派における真俗二諦のシンボル」と明言されました。二年間の学習を経、また当日その場でこの言葉を聞かれた総長は、いま「見真額」をどのように受け止め、今後どうされるつもりかお聞かせください。

再び総長演説の言葉に帰れば、同朋会運動の中で部落差別問題、靖国問題、教団問題等の重要な問いをたまわり、厳粛な懺悔に基づく菩提心の結実として成立したものが宗憲であり、そこに表現された願に生きることが同朋会運動推進の根本でありました。だとすれば、今述べてきた三つの問題の空洞化は、そのまま宗憲の精神の空洞化に直結することは不可避であり、同朋会運動の空洞化をもたらすことは必然です。

思えば御遠忌とは、あらためて親鸞聖人の教えに立ち帰り、そのことによって教えからの乖離と教団の空洞化の事実を深い懺悔を持って自覚し、そこから新たな意欲を持って歩み出すべき機会でありました。しかるに同朋会運動50年、宗憲30年の節目の年

でありながら、その初心の精神・理念に立った本格的総括が今もってなされない。加えて、当局が総括として出された「総括・提起書」には、宗憲の根本精神が教団の現在を批判的に照らす視座としてではなく、財政の明確化の名のもとに用いられている事実は、宗憲の精神の空洞化以外の何ものでもないでしょう。

こうした教団全体を覆う空洞化の根源に、教学の問題があります。既に 1988 年に、時の総長の名で、以下の指摘がなされています。

大谷派教団における教学が、久しい間にわたりこのように現実の社会問題と信心の問題とを切り離すことによって、結局は権力体制を擁護し、差別構造を容認し、現実を無批判的に受け容れてきた歩みを私どもは深く考えなければならぬのであります。

ここで言われる教学こそが、真俗二諦論そのものでしょう。戦時教学を生んだ真俗二諦論は、それ以前もそして現在も形を変え生き続けています。その限りわが教団は、改憲により戦争のできる国へと舵を切りつつある現在の日本の状況下で、再び同じ誤りを犯す可能性を払拭できません。かつて和田稔先生は教団の戦争責任について、「直接戦争に協力したということ以上に、万人に開かれた浄土真宗を、体制教団の温存と引きかえに国家に売り渡し、真宗門徒を天皇制国家の臣民に仕立てあげたこと」にあると喝破されました。

戦争責任は過去に対することだけではありません。かつて戦争に協力した教団を生み出した教学が現在も持続しているということであれば、その教学に対していかなる態度をとるかということは現在における戦争責任の問題であり、将来起こりうる戦争に対しての言わば未来に対する責任が現在あるということです。

総長は、教団の教勢の低下、寺院をめぐる環境の変化、それに伴う財政の悪化に対して危機的状況であると言われました。確かに教団に身を置き寺で生活する我々にとって、それは身に迫った危機です。しかしあえて言えばそれは表層の危機であって、深層の危機は教団の空洞化・教学の空洞化、精神と理念の空洞化ということにあります。表層の危機のみに目を奪われて深層の危機を見失えば、かえって教団のいのちは失われることになるでしょう。この危機意識に立って教団全般にわたる点検総括を行うことをお願いして、私の質問を終わります。